

提 題

知識人からユマニストへ
—— 15 世紀イタリアの知的世界 ——

伊 藤 博 明

はじめに

本提題のタイトルは、フランスの中世史家でアナール派を代表する一人、ジャック・ル・ゴフ (Jacques Le Goff, 1924-) が 1957 年にスイユ社から刊行した『中世の知識人』(*Les intellectuels au Moyen Age*) の第 3 章「知識人からユマニストへ—— 14・15 世紀」から採られている。より正確に言うならば、その邦訳¹⁾から採られており、原文では“De l’universitaire à l’humaniste”，すなわち「大学人からユマニストへ」と題されている。ここでは、ル・ゴフが中世における「知識人」という表現に込めた意味を考慮して、「知識人からユマニストへ」と表記することにしたい。

さて、本書でル・ゴフは、「知識人」(intellectuels) を、12 世紀に都市の学校で成長し、13 世紀以降は大学を舞台に活躍した、自己の思索を重ね、その成果を教授した者と定義している。そして、この中世の知識人と、ルネサンス期のエラスムスやラブレールを代表とするユマニストを対比させて次のように述べている。「前者は学生に取りこまれ、聴講生が押しかける席にかこまれて、教えることに精をだす教師である。後者は閑静な書齋に身を置き、思索を自由に羽ばたかせ、心地よい豪華な部屋でくつろぐ孤高の学者である」²⁾。

ここでル・ゴフは、スコラ学の硬直性を批判するユマニストが大学の外で、多くは教皇・君主・貴族・大商人の庇護のもとに、宮廷・アカデミー・私的な書齋において学問的探究を進めたことを示唆している。しかしル・ゴフが、「ユマニストが、知識人の主要な任務の一つである民衆との接触、学問と教育の密接な関係を顧みなくなる」³⁾と述べるとき、彼の主張は一面的であると感じざるをえない。はたして中世の知識人が語りかけたのは「民衆」に対してだったのか、という問いは措くにしても、ルネサンス(とりわけ印刷術の発展期)以降は、学問と教育を含む「知的世界」が大きく変容したと、むしろ考えるべきではないだろうか(たとえば、ペイコン、ガッサ

ンディ、デカルト、ホブズ、スピノザはどこで活動したのだろうか。

本提題では、15世紀のイタリア、とりわけフィレンツェをケース・スタディとして、ルネサンスにおける「知的世界」の変容について考察することにしたい。このことは、今回のシンポジウムに関して川添信介先生が提起された、「中世から近世初頭にかけて思想の内部で、そして、思想と社会の関係においてどのような変容が起こったのか、あるいは起こらなかったのか」という問題に関して、ある側面から照射することになるだろう。

そして、この考察をすすめる際に、ある一つの論点を、すなわち、ギリシア学、とりわけプラトンの著作の流布とプラトン主義的な哲学の興隆、という論点を念頭におきながら進めたい。というのも、中世においては数著作しか知られていなかったプラトンの著作が、15世紀に入ってラテン語へと次々と訳出され、そして、マルシリオ・フィチーノ(Marsilio Ficino, 1433-1499)の全訳(1484年)によってヨーロッパに改めて紹介されたことは、哲学的にはきわめて大きな事件であったと考えられるからである。

1 ペトルルカとプラトンへの関心

一般にルネサンス・ユマニストの先駆者と評されているのは、ボローニャ大学で法律を学んだ詩人のフランチェスコ・ペトルルカ(Francesco Petrarca, 1304-74)である。彼はギリシアの古典に強い関心を抱き、ホメロスを始めとして貴重な写本を苦勞して入手し、ギリシア語を学ぼうとさえした。そして、彼のギリシア語習得の最大の目的は、プラトンの著作を原語で読むことだった。当時のヨーロッパにおいて、アリストテレスの著作はほぼすべてがラテン語訳で読むことができたのに対して、プラトンのラテン語訳は、4世紀にカルキディウスによって翻訳された『ティマイオス』(部分訳)、そして12世紀にヘンリクス・アリスティップスによって訳された『メノン』と『パイドン』だけであり、その他には、ムールベケのグイレルムスによって訳された、プロクロス『パルメニデス注解』に含まれた断片しか存在しなかった。

とはいえ、中世がアリストテレス主義一辺倒というわけではなく、プラトンの伝統も確かに存続していた。古代の伝統は、アプレイウス、セネカ、キケロ、マクロビウス、ポエティウスといったラテン作家に受け継がれ、とりわけ教父アウグスティヌスに影響を与えた。アウグスティヌスの影響は中世を通じて衰えることはなかったし、

ペトラルカが最も傾倒したキリスト教作家はアウグスティヌスであった。ペトラルカのプラトン讃美の一因は、アウグスティヌスが「プラトン派の書物」によってキリスト教徒へ転換した事実に求められる。『親近書簡集』(*Familiarium rerum libri*) 第2巻9で述べられているように、プラトンはキリスト教的真理に最も合致するギリシア哲学者と見なされ、その教えは、古代ローマにおける最もキリスト教的な作家キケロに受け継がれたと考えられた。ペトラルカははっきりと、アウグスティヌスが異教の詩人や哲学者たちを排除することはなかった、と主張している⁴⁾。彼は、プラトンのギリシア語原典を多数所有しており、南イタリア出身のギリシア人レオンツィオ・ピラート (Leonzio Pilato, ?-1366) からギリシア語の手ほどきを受けた。しかし、結局はこの言語の習得には至らず、本格的なプラトンの復興は、ペトラルカの次の世代に委ねられたのである。

2 マニユエル・クリュソロラスとギリシア語の学習

フィレンツェ大学において初めてギリシア語が教えられたのは1361年であり、それはボッカッチョの尽力によるものだった。講師は上述のレオンツィオ・ピラートであり、彼はホメロスをラテン語訳し、またボッカッチョの『異教の神々の系譜について』(*Genealogia deorum gentilium*) の執筆に貢献したと推測されている。しかし、ギリシア語学者の養成という点においてはほとんど成果を上げることができなかった。フィレンツェにおけるギリシア語の本格的な教授は、1397年にビザンティンからマヌエル・クリュソロラス (Manuel Chrysoloras, 1350-1415) が招聘され、ギリシア語講座が開かれてから始まった。この招聘は、当時フィレンツェ市の書記官長の任にあったコルッチョ・サルターティ (Coluccio Salutati, 1331-1406) が画策したものであった。

当時のビザンティンの教育は修辞学的訓練を重視していた。この点では、イタリアのユマニストの教育と共通するところがある。だがイタリアとは異なって、ビザンティンのカリキュラムは、形而上学、数学、自然科学をも含んでおり、全人的な教養を授けることを目的としていた。そして理論的な神学はこの教養の最も高次な部門と考えられていた。11世紀以来、彼らの間では、アリストテレスの著作とともにプラトンの著作も注意深く読まれ、両著作とも平等に研究の対象となっていた。クリュソロラスのフィレンツェ滞在は2年余と短くはあったが、ユマニストたちに多大な影響を与

えた。その影響はたんにギリシア語の習得という側面だけではなく、ビザンティンのカリキュラムの伝播という側面も含んでいたと考えられる。

3 レオナルド・ブルーニと「市民的ユマニズム」

クリュソロラスの弟子として最も著名なユマニストが、1427年から44年までフィレンツェの書記官長の要職にあった、レオナルド・ブルーニ (Leonardo Bruni, 1370-1444) である。彼は、アリストレスの諸著作を、すなわち『ニコマコス倫理学』、『政治学』、『弁論術』、偽『経済学』などを訳出した。これらのラテン語訳は、すべてが必ずしも正確とは言えないが、スコラ的な翻訳に比べてより忠実に原典のニュアンスとスタイルを伝えている。他方、プラトンについては、『パイドン』の新訳を始めとして、『ゴルギアス』、『パイドロス』、『ソクラテスの弁明』、『クリトン』、『饗宴』といった対話篇を続々と訳出していった。

古典古代の学芸の再生を試みようとした点で、まさにサルターティやブルーニはペトラルカの弟子であった。だが、彼らのユマニズムの性格は、師たるペトラルカとは異なるものへと変貌していた。まず、彼らの生き方の相違について指摘しておかなければならない。ペトラルカは終生旅に明け暮れ、定住することの稀な人間で、確かに政治的な事柄への関心は深かったが、彼の能力は主として文学的な分野で発揮された。他方、サルターティとブルーニは、両者とも長い期間にわたって、フィレンツェの書記官長を務め、政治的にも実際に活躍した人物である。15世紀の前半においては、他の都市のユマニストたちを見ても、教皇や貴族の秘書官や書記、あるいは法律家や公証人であり、大学に籍を置いて講義したり、また詩人や作家を主たる職業とする者はきわめて稀であった。

フィレンツェの「市民的ユマニスト」の現実的関心は、必然的に古典古代の受容の仕方に、ペトラルカとは異なる態度をもたらした。すなわち、プラトンやアリストテレスの著作は、善き人間性を原理的に探究するというよりも、社会を構成する市民としての道徳を明らかにするものとして受容された。また、社会自体を改善しようとする目的から参看されるようになった。言い換えれば、プラトンやアリストテレスはきわめて実践的で政治的な模範を提供する哲学者として蘇ったのであり、その限りににおいてプラトンとアリストテレスとの間に優位性の問題は設けられなかった。先に見たように、ブルーニは両哲学者の著作を区別なく翻訳している。

4 ヨハネス・アルギュロプロスとアリストテレス哲学

15世紀中葉のフィレンツェでは、コジモ・デ・メディチ（Cosimo de' Medici, 1389-1464）の政治的主権が確立されていくにつれ、ユマニストたちの関心は、修辭的・道徳的問題から、形而上学・神学的問題へと移行していく。当時、フィレンツェのユマニストたちに多大の影響を与えたギリシア人学者は、1453年のコンスタンティノープル陥落によってイタリアに逃れてきたヨハネス・アルギュロプロス（Johannes Argyropulos, ca. 1415-87）である。彼は1456年から71年までの長期にわたって、フィレンツェ大学においてギリシア語の教授を務めた。大学において彼は、アリストテレスの諸著作について講義したが、その内容は体系的にアリストテレス哲学を学ぶというものであった。ドナート・アッチャイウォーリ（Donato Acciaiuoli, 1429-78）などの聴講者のノートから判明しているところでは、始めに「論理学」についての私的な講義を行ったのち、『ニコマコス倫理学』、『政治学』、『自然学』、『靈魂論』、『気象学』、そして『形而上学』と読み進めていった。この点では、ブルーニのような初期ユマニストにおける倫理学・政治学的関心よりも広い領域を網羅し、また、当時の医学部・教養学部における論理学・倫理学・自然哲学的テキストの講読から一段と発展して、『形而上学』を含む、まさにアリストテレス哲学全体に及ぶものであった。

彼が学生にアリストテレス哲学だけを講義していたのか、そしてプラトン哲学については沈黙していたのかについては、従来より議論がある。たとえば、1459年に人文主義者ピエルフィリッピーノ・パンドルフィーニ（Pierfilippino Pandolfini, 1437-97）のドナート・アッチャイウォーリへの書簡では、アルギュロプロスが『メノン』について論じていたことが知られる。「彼はこう語りました。私はあなた方にこの人物の、『メノン』と題する対話篇について説明することにしましょう。あなた方はこのプラトンの書物に満足するに相違ありません。というのも、その教説、雄弁、賢慮、知恵がいかに偉大であるかを、もしあなた方が聞こうと望むならば見てとることになるでしょうから」⁵⁾。また、この書簡から4年後1463年9月に、ドナート・アッチャイウォーリは、スペイン人歴史編纂家のアルフォンソ・デ・パレンシア（Alfonso de Palencia, 1423-92）宛の書簡において、アルギュロプロスについて次のように述べている。「彼はアリストテレスの多くの著作をラテン語に訳し、プラトンの見解とその秘密と隠された教説を仔細に明らかにしたので、聴衆に大きな驚嘆を起すことになり

ました」⁶⁾。

いずれの書簡も、アルギュロプロスがプラトン哲学に言及したことは伝えているが、このことからプラトン哲学が大学での教育プログラムに正式に含まれていたと結論することはできない。結局、プラトン哲学について十全に論じることは、マルシリオ・フィチーノを待って初めて可能になるのである。

5 フィチーノとプラトン・アカデミー

フィチーノは、大学ではアリストテレス派の自然学と医学を勉強したと推測されるが、青年期の関心は広範囲に及んでおり、とりわけプラトンへの傾倒が見られる。このことを示すエピソードが、アントニオ・デリ・アリ (Antonio degli Agli, 1400-77) の対話篇『神秘の天秤について』(De mystica statera) に含まれている。アリはフィチーノより33歳年上の聖職者で、この著作は1455年から57年頃に書かれた。この対話篇に登場するのは、アリ自身を示す「アントニウス」と、フィチーノを示す「フェキヌス」(Fecinus)である。対話篇の最後の部分で、アントニウスはフェキヌスの異教の哲学への傾倒を心配して次のように語る。「たしかに、神の認識をもたない者たちはすべて空しい。プラトンや彼に類した他の者たちから離れて、すぐにそれ〔神の認識〕へと戻りなさい」⁷⁾。しかし、アリの勧告にもかかわらず、フィチーノはプラトンを始めとする異教の哲学研究に没頭していくのである。

さて、フィチーノは1462年あるいは1463年に、コジモ・デ・メディチからカレッジの別荘とプラトン全集を与えられ、そこで成立したのが、有名なフィレンツェのプラトン・アカデミーであると、旧来言われてきた。このプラトン・アカデミー成立の根拠とされてきたのが、フィチーノが1492年に刊行したプロティノスの翻訳の、ロレンツォ宛の序文における次のような記述である。「祖国の父、大コジモは、教皇エウゲニウスのもと、フィレンツェでギリシア人とラテン人の会議が開催されたとき、……ゲミストス・プレトンの熱心な口調に動かされたコジモは、その高邁な精神に、然るべきときに第一にアカデミーを設立しようという思いを抱いた。その後、かの大コジモ・デ・メディチは、そのことを思い起こして、彼の侍医を務めるフィチーノの息子である、まだ年若かった私に、この大きな仕事を課したのである」⁸⁾。

フィレンツェでの東西キリスト教会の合同会議からほぼ55年後の、プラトン・アカデミーの成立から約30年後の、このフィチーノの発言はしばしば信憑性が疑われ

ていたにも関わらず、基本的には採用されてきた。また、成立の時期については、かつては1462年のフィチーノからコジモに宛てた書簡に見える「瞑想の礼拝所として、カレッジの地に用意されたアカデミー」⁹⁾という表現が参照されてきたが、最近発見されたフィレンツェの国立文書館所蔵の証書(1463年4月18日)には、「コジモがフィレンツェのコンタード、カレッジのサン・ピエトロ地区、ラ・コスタと呼ばれた場所に位置する地所付きの家を財産贈与した」¹⁰⁾と記載されており、時期も確定された。

こうして、フィチーノがいわば学頭となったプラトン・アカデミーは、既存のフィレンツェ大学とは一線を画しており、フィレンツェ郊外の別荘において集会をもった、いわば知的エリートによる閉じられた団体であると、これまで理解されてきた。しかし、近年のジョナサン・デイヴィーズ、アーサー・フィールド、ジェイムズ・ハンキンズらの研究は、従来の見方を大きく変えることを要請している¹¹⁾。たとえば、ハンキンズは、上述したフィチーノのプロティノスへの序文に見える「アカデミー」がいわゆるアカデミーの組織体を指すのではなく「プラトンの著作」を意味すると解釈して、プラトン・アカデミーの存在が「神話」であったとさえ主張している。

6 フィチーノとフィレンツェ大学

また、フィチーノとフィレンツェ大学との関係も最近発見された資料から明らかになってきた。従来より、フィチーノがアカデミーの内部だけではなく、また「公に」(publice) 講義をおこなったと考えられていた。16世紀初頭にフィチーノの伝記を書いたジョヴァンニ・コルシ(Giovanni Corsi, 1472-1547)はそのフィチーノ伝において、「マルシリオは、ピエロ・デ・メディチの時代に、押しかけた多数の聴衆を前にして、公に、プラトンの『ピレボス』を解釈した」¹²⁾と述べている。そして彼が公開講演を行った場所としては、いくつかの資料から、フィレンツェ中心部に位置する、サンタ・マリア・デリ・アンジェリ聖堂が候補に挙げられている。

ところが、最近、フィチーノがフィレンツェ大学において講義していたことを確認する事実が、ジョナサン・デイヴィーズによって明らかにされた¹³⁾。その資料とは、フィレンツェ国立文書館に所蔵されている、フィレンツェ大学の俸給額の一覧である。これは部分的にしか記載されていないのだが、それによると、フィチーノは1466年に講師給として40フィオーリーノを支給されていた。ちなみに、同じ頃のアルギュロプロスの受領額は400フィオーリーノである。フィチーノは長年の間、フィレンツェ大

学において講義をしていたようで、すなわち、大学においても公然と、プラトン哲学が教えられていた可能性がきわめて高い。つまり、プラトン哲学、そしてフィチーノの教説も狭いサークル内だけで教えられたり、書物を通じて広められただけではなく、大学やサンタ・マリア・アンジェリ聖堂における講義を通じて、じかにフィレンツェの人々に伝えられていたと推測しうるのである。そして彼が講じた哲学は、主著『プラトン神学』(*Theologia platonica*)の題名が示唆しているように、独特なシンクレティズムに基づくものだった。

7 フィチーノの「プラトン神学」

フィチーノは自著『キリスト教について』(第13章)において、キリスト教と異教の哲学の関連について議論している。彼によれば、キリスト教とは異なるさまざまな宗教が、キリスト教の権威を部分的にはあるが認めているように、異教の哲学者もまたキリスト教が示す真理を部分的にはあるが保有していた。たとえば、オルフェウス、プラトン、ヘルメス・トリスメギストス、ゾロアスターといった「古代の神学者」も、キリストの生誕について先駆的な予言をしていたのである。『ヨハネによる福音書』冒頭部で語られているように、「始めに〈ロゴス〉があった」。そしてこの〈ロゴス〉は受肉しキリストとして地上に現れた。フィチーノによれば、オルフェウスはこの〈ロゴス〉をゼウスの頭部から生まれるパラスと名づけた。プラトンは、ヘルメイアス宛の書簡において「父の神の子」と、また『エピノミス』では〈ロゴス〉、すなわち「理性とことば」と呼んだ。ヘルメスは、何度も神の知恵について語りながら「神の子」と呼び、「壺」にも言及している。さらにゾロアスターにおいても同様なことが見いだされる。彼らがこうしたことを述べることはできたのは、神の助力があったからであり、神は自らが欲した人々に啓示したのである¹⁴⁾。

フィチーノによれば、ヘブライの知恵は「古代神学」に流れ込み、それはプラトンによって集大成された。彼が『キリスト教について』において与えている「古代神学」の系譜は、ゾロアスター、ヘルメス、オルフェウス、アグラオファモス、ピュタゴラスであり、彼らの知恵はプラトンの書物にすべて含まれているとされる¹⁵⁾。そしてフィチーノにとって、諸哲学の中でもとりわけキリスト教の信仰へ導くものは、「神的なプラトン」の哲学であった。それは、いわば「プラトン神学」と呼ばれる哲学的神学であり、キリスト教的神学を補足するものと見なされる。それらは内容的に

一致しており、ただ形式上においてのみ区別されるのである。フィチーノはプロティノスの翻訳の「序文」において、神的なプラトンと偉大なプロティノスを翻訳したのは、「神の摂理」によって導かれた結果だった、と述べている¹⁶⁾。彼の死後、その肖像はサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂内に設置されたが、手に抱えている書物は聖書ではなく「プラトン全集」であった。

8 アントニオ・デリ・アリと「古代神学」

さて最後に、フィレンツェの「知的世界」の広がりに関して、一人の聖職者に触れておきたい。その人物とは、先に言及した、フィチーノの師であったアントニオ・デリ・アリである。彼はたしかにフィチーノとは親しい関係を持ち、有名なフィチーノの『饗宴注解』においては演説者の一人として名前を挙げられている。しかし、ラグーサ、フィエゾレ、ヴォルテッラの司教を歴任し、実際的な教会人として一生を過ごした人物で、決して第一級の思想家と呼ぶことはできず、彼の残した論考は、ごく一部が紹介されているだけで、ほとんどすべてが未刊行のままである。

上述した『神秘の天秤について』においてアリは、フィチーノに「プラトンや彼に類した他の者たちから離れなさい」と勧告していたが、その後、アリ自身も、おそらくはフィチーノの影響のもとに、同様な関心を抱いていくことになる。たとえば、対話篇『信仰の根拠について』(*De rationibus fidei*)においては、「古代神学」への言及とともに、それとキリスト教の教義の一致が説かれている。そこに登場するソフィアは次のように述べている。「プラトンは、たしかに〈一なる主〉について理解していました。……ヘルメス・テルマクシムス [トリスメギストス] はすべてを〈一〉に帰しています。ストア派の人々は、〈一なる神〉がその業のゆえに、多くのさまざまな名称によって呼ばれていると証言しています」¹⁷⁾

われわれはこうして、フィチーノの教説が、フィレンツェにおける狭い知的サークル内だけでなく、市内の聖堂や大学での講義を通じて市民や学生へと語りかけられ、教会の職務を忠実に全うした実際的な聖職者に対しても影響を与えたことを知るのである。その教説はさらに広い範囲に、たとえば、フィレンツェの一商人(フランチェスコ・サッセッティ [Francesco Sasseti, 1421-90])に影響を与えたことについても、資料的に明らかにすることができるし、他方では、フィレンツェの枠を超えて、ローマの教皇庁まで(エジディオ・ダ・ヴィテルボ [Egidio da Viterbo, 1465/69-1532])

を介して) 到達したことも指摘することができるのである¹⁸⁾。

註

- 1) ジャック・ルゴフ『中世の知識人』, 柏木英彦・三上朝造訳, 岩波新書。
- 2) 『中世の知識人』, 同上訳, 216 ページ。以下も参照のこと。J・ルゴフ『中世とは何か』, 池田健二・菅沼潤訳, 藤原書店, 143 ページ。
- 3) 『中世の知識人』, 同上訳, 216 ページ。
- 4) ペトラルカ『親近書簡集』, 近藤恒一訳, 岩波文庫, 87-89 ページ。
- 5) Firenze, Biblioteca Nazionale Centrale, Ms. Magliab. VI, 106, fol. 108r, citato da Eugenio Garin, “Il problema dell’ immortalità nella cultura del Quattrocento in Toscana,” in Idem, *La cultura filosofica del Rinascimento italiano. Ricerche e documenti*, Firenze, 1961, p. 117.
- 6) Firenze, Biblioteca Nazionale Centrale, Ms. Maglib. VIII, 1439, fol. 47v, citato da Eugenio Garin, “Donato Acciaiuolo cittadino fiorentino,” in Idem, *Medioevo e Rinascimento*, Roma - Bari, 1974, pp. 222-223, nota 30.
- 7) Antonio degli Agli, *De mystica statera*, Napoli, Biblioteca Nazionale, cod. VII F 6, fol. 33r.
- 8) Marsilio Ficino, “Prohemium in Plotinum ad magnanimum Laurentium Medicem Patriae Sarvatorem,” in Idem, *Opera omnia*, Basel, 1576 [rpt. Torino, 1962], p. 1537.
- 9) *Supplementum Ficinianum*, ed. P. O. Kristeller, Firenze, 1937, vol. 2, p. 88.
- 10) *Marsilio Ficino e il ritorno di Platone. Mostra di manoscritti, stampe e documenti*, a cura di S. Gentile, S. Niccoli e P. Viti, Firenze, 1984, p. 175.
- 11) Cf. Jonathan Davies, “Marsilio Ficino: Lecturer at the Studio fiorentino,” *Renaissance Quarterly*, 45 (1992), pp. 785-790; Idem, *Florence and Its University during the Early Renaissance*, Leiden - Boston - Köln, 1998; Arthur Field, *The Origins of the Platonic Academy of Florence*, Princeton, 1988; James Hankins, “Cosimo de’ Medici and “Platonic Academy”, *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 53 (1990), pp. 144-162; Idem, “The Myth of the Platonic Academy of Florence,” *Renaissance Quarterly*, 44 (1991), pp. 429-475.
- 12) Giovanni Corsi, *Vita Marsili Ficini*, in Raymond Marcel, *Marsile Ficin (1433-1499)*, Paris, 1958, p. 683.
- 13) Cf. Jonathan Davies, *Florence and Its University during the Early Renaissance*.
- 14) Cf. Ficino, *De religione christiana*, proemium, *Opera omnia*, p. 18.
- 15) Cf. Ibid., p. 30.

- 16) Cf. Ibid, p. 1537.
- 17) Antonio degli Agli, *De rationibus fidei*, Firenze, Biblioteca Nazionale, Ms. Conv. Soppr. B 9 1268, fol. 40r-v.
- 18) シンポジウム当日は、これらの点についても論及する予定で、そのための資料も配布したが、結局、発表者の不手際により採り上げることができなかった。また、提題に先だって紹介した、カッシーラー、クリステラー、ランダル・ジュニア編の『ルネサンスの人間の哲学』に収められた、ペトラルカの『自己および他の人々の無知について』の紹介は割愛した。

提題「スコラ学」における学／哲学としての神学の誕生

加藤 和哉

はじめに

中世から近世へというまなざしのもと、学問ないし知識のあり方を問うという本年のシンポジウムのテーマについて、中世の側から発題するにあたり、いわゆる「スコラ学」の問題に触れないわけにはいかないだろう。われわれのもとで、思想史上の一時代を示すものとして用いられているこの語は、もともとその時代の人々がみずから用いたとおりのものでは必ずしもなく、近世の側から、その時代の知のあり方を批判的にとらえて与えられたものだったからである。もとより近世の「スコラ」批判は、それら批判者の同時代的状況とその中でのかれらの立ち位置に基づくものであり、せいぜい中世末期のスコラ学との関係で解明されるべきことがらであろう。さらに、近年の諸研究は、両者の間に、大学をはじめとした教育組織、著作の形式、扱われる文献の種類といった点において、断絶よりもむしろ連続性が強いことを明らかにしてきたように思われる。それでも、近世思想は「スコラ学」の否定の上に打ち立てられたのだという見方は、かつて西欧においてあまりに広く流布したためか、遠くわれわれの足元にもおよんでいて、既にさまざまに見直されてはいても、依然としてわれわれの学問研究のあり方を支配していると思われる。ただ、本学会会員諸氏もそうであると信じるが、私としては、中世の神学ないし哲学のテキストの研究にこれまで携わっ